人間環境活性化研究会会報　（第 11 号）1997－10－01 発行　　・

『HEART から地球を眺めて』

理事　　藤田　慶喜

今世紀がもうすそ終わろうとしている。多くの面で進歩、発展を見せた素晴らしい世紀ではあったが、同時に過去に人類が犯した過ちを再び繰り返してしまい、相も変わらない弱点と、社会が発展進歩したことによって発生した新たな課産や問是点の深刻さを認識させられた世紀でもあった。

今春から勤務している大学に、いわば同期生として赴任した同僚に、故マハトマガンジーの孫がいる。彼は祖父と同様に世界平和推進活動をしている。彼との職場での会話の中で故ガンジーは「近代文明が肉体的幸福を追及しているのは誤りで欲望の抑制が伴う文明こそ真の文明である」と考えていたことを、伝えてくれた。

我々は敗戦後の瓦礫の中から立ち上がって、今日の経済的地位を営々と築き上げることに貢献してきたこれまでの戦略、価値観、社会システム、国際関係などを急いで再点検する必要に迫られている。このことは、我々が敗戦後にやってきたことに誤りがあったということではなくて、21 世紀の地球社会が求めているものや、問題の大きさに関する優先順位が変化してきたと考え、反応した方がよいのではなかろうか。

今年になって、役所、金融、証券、総会屋関連などに不祥事が続いて発生している。たまたま表沙汰にならなかったにすぎなかったものが、一斉に国民の目にふれるようになったものであろう。類似事件は以前にも散見されていたが、その時に根本的に正さなかったからである。これは、今悪者になっている人だけではなく、その周辺にいた人物なら、絶対に知り得たし、警告を発し得た筈である。何故しなかったのだろうか。

国連機関で、多くのことを学んだが、その中で、思いおこすのは、「自分の心に忠実であれ」という事である。我々は、狭い国土に育ち、周囲に気をつかう秩序の中で暮らしてきた。心のままに発想し発言することに慣れていない。

彼等からみると、その場の雰囲気、人間関係などを守らんがために、自分の意見、見解、異議などを押し殺すのは、自分自身に忠実ではないとみなす。正直な行為とみなさない。自分が納得いかなければ、堂々と意見を述べる人物が評価されるし、その少数意見に対し極力チームとしての配慮をする。「陰でこそこそ」は嫌われる。

知っていて止められなかったのは、我々の中にある、仲間意識、金太郎飴指向、ソフトランディング願望、波風立たせないシンドローム、非連続より連続を期待する変革回避指向など、農耕民族が持ってきた精神的遺産も因であろう。

さて、21 世紀はどうなるだろうか。

地球がせまくなり、これまで維持されていた上記伝統的遺産を維持していくのが、かなり難しくなる。あまり固執すると、世界との間に隔たりが生じてしまう。先進国グループと途上国グループとの間に存在した社会環境、人口構造、経済構造、国家目標、価値観などの差が相互に変化をしながら影響を与える。特に先進国では個人価値を最大限に求める傾向が強まり、国家より自分自身に依存する風潮となるために、コンセンサスが得られにくく、団体や組織の維持がこれまで以上に難しくなろう。

目下、日米 21 世紀委員会では各界のリーダーが自主的に集まり将来に横たわる問題を話合っている。このような議論、検討はリーダー間だけではなく、国民各層で行われることが望ましい。その時必要なことは相手に通じるコミュニケーション能力を持つことである。話の前置きが長い、非論理的、結論が不明、など多くの日本人について、外国人が述べる感想である。この根本原因は個が確立されていないことにあるように思える。

しかし一方で、明治初期に日本に住んだ西欧の専門家は異口同音に、その頃の日本人の律義さと自制心の強さに感心をしている。確かに、口数は少なく喜怒哀楽を表に出さない人が多かったが、いつの間にか相手が理解し賞賛するものを与えていた。信頼を勝ち得ていた。

地球が狭くなり、相手とのコミュニケーションの頻度は増しているが、昔に比して相互理解を醸成する時間が短くなる傾向にある。だからといって、西欧人的表現法が我々に相応しいとは考えにくい。両者の経営比較での議論に似ている。どうも日本式にはそれなりの良さがあり簡単には捨て去りにくい面が多い。同様に人間の質についても、個　を確立しながら、自己を抑制する能力を身につけた日本人が理想型としてイメージされるものの、今のままでは、時代のうねりに流されて、日本人の良さが失われてしまう気がしてならない。

大量生産、大量消費、大量廃棄の文明が見直されている。人間以外の生態系に生存権を与えつつ、地球上で横広がりで同じ時間軸で生存する「共時性」と

時間的接点は無いが、同じ地球に過去、未来に生存する先祖、子孫との「通時性」を

両立させる生き方、考え方が強くなってきている。

故ガンジーの言葉を再度考えてみたい。

（桜美林大学経営政策学部　教授）